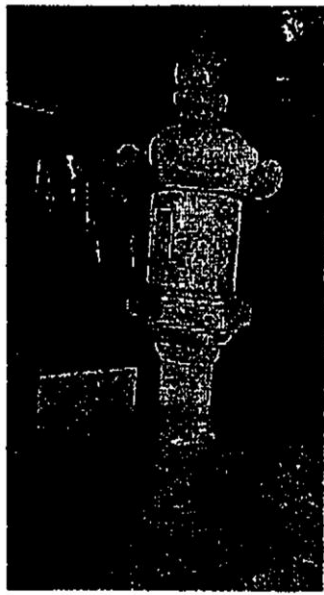


時の流れの生き証人



天然氷製造記念燈籠

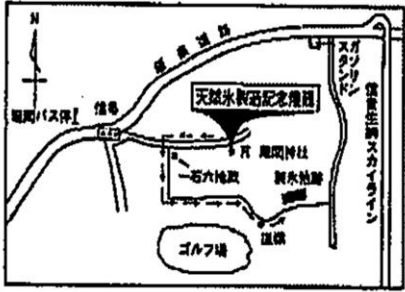
龍問

龍問神社境内の狛犬（こまいたぬ）の隣りの一對の燈籠（とうろう）は、龍問で天然の水を作っていたのを記念して、昭和五年に建てられたものである。

平安時代の書物「延喜式」によると、現在の本

龍問神社境内の狛犬（こまいたぬ）の隣りの一對の燈籠（とうろう）は、龍問で天然の水を作っていたのを記念して、昭和五年に建てられたものである。

平安時代の書物「延喜式」によると、現在の本



龍問には大正時代末ごろまで天然の水を作っていた製氷池が今でも残っている。左の略地図の矢印のように、龍問神社から二十分ほど歩くとゴルフ場に行きあたり、「右 宝山寺」と刻まれた小さな道標が見つげられる。そこを左に折れ、さらに進むと左手に縦三十四段、横六段の長方形の製氷池跡が現れる。

時の流れの生き証人

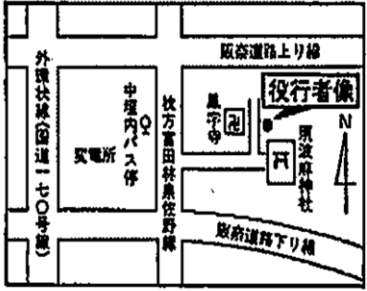
役行者像

中垣内三丁目



役行者は、奈良期の呪術師役小角のことで、高城山にこもって修業を重ね、取得した呪力で前途に不安な民衆のためのいろいろな予言をし、修験道の祖と言われている。山岳信仰が広まり、修験者が各地で修業する

風潮が盛んになると、理想として仰がれるようになり、その足跡は全国各地に及んでいる。特に修験道場として神聖視される熊野、大峰、さらにそれに連なる生駒山系も修験者の行場となった。市内にも、新田、灰塚、



赤井、龍問、中垣内などで修験者とかかわりのある行者堂や役行者像をみる事ができる。

中垣内の須波麻神社北側の風字寺東側にある高さ約百二十センチの役行者像からは、造立年の銘は見当たらないが、体得した呪力や神通力で山から山へ飛び歩いた仙人と仰いだ役行者の面影がしのばれる。